

忙しい夜が過ぎ、朝が来て、そして昼。

マスナン爺さんは、エーデルワイスを抱えて墓参りに行った。コングに感謝しつつ。

夜通しマードックの雑念を払い続け、結局マードックと禪問答を始める前に、クツワダさんは出社していかなければならなくなった。一睡もしていないクツワダ氏、眠いはずなのに、彼の目はキラキラと燃えていた。一方、マードックの両肩は叩かれ続けて腫れていた。編み物をしていた時に感じていた肩凝りはなくなったにせよ。

以上二名、現在就寝中。

キムは病院へ。マリアンは未だテレフォン・オペレーター続行中。オリバーは、着の身着のままベッドで爆睡。フリオは、陣痛に三日以上苦しめられてはいるものの一方向に破水しないガブリエラの額の汗を拭いている。ユリアは……恐らく一人ぼっちでブランチを食べていることだろう。

ハンニバルはその時、マンション二階のハイデンさん宅で、ミセス・ハイデンのお手製クッキーをいただきながら、ミスター・ハイデン（微かに面識のあるせつかち爺さん）のお話を伺っていた。別に、文句を言われているわけではなくて、数時間前にたつぷりとお礼を言われた後だ。寝ているミスター・ハイデンを起こさないように一人で病院へ行ったミセス・ハイデンを、死の淵から救い出してくれたお礼を。

ところで、ハイデン宅からはどんな依頼が来ていたのかと言うと。一、ベランダの排水管が詰まっているので掃除もしくは修理をしてほしい。二、ベランダの手摺が壊れているので修理をしてほしい。三、妻のザウアークラウト作りを手伝ってほしい。——たった三つ、簡単なもんだ。

ハンニバルは、ベランダの排水管と手摺についてはコングに直させ、ザウアークラウト作りはマードックに手伝わせることにした。そして、そのようにハイデン夫妻に約束した。コングとマードックの意向は全く無視して。

で、ハンニバルがミスター・ハイデンから何の話を聞いているのかというと、第二次世界対戦時の暗号解読およびニュルンベルク裁判の話である。タクシー運転手に既に飽きている、ということもあって、ハンニバルは非

常に真面目に先人の言葉に耳を傾けている。

さらに、ミスター・ハイデンも葉巻を愛好しているのである。今やハイデン宅リビング（珍しく普通のリビング）は葉巻の煙でもうもうとしており、ミセス・ハイデンもかーなり嫌な顔をしている。しかし、妻の迷惑そうな顔に気づかないのが、気づいたとしても気づかない振りをしているのが、夫というものである。ミセス・ハイデンが心臓を悪くした理由がわかってしまった。

「あなた、いい加減にしないと、私は心臓病で、あなたは肺ガンで、キムのお世話になる、なんて事態になってしまいますよ。」

ミセス・ハイデンが冷たく言った。それを聞くなり、ミスター・ハイデンは葉巻を灰皿に押しつけ、ハンニバルもそれに倣った。げに恐ろしきはキムなり。

「ああ、キンケイド君。」

某石油会社のアブダビ支社で、ミスター・キンケイドは上司と呼ばれた。

「何でしょう、支社長？」

何かミスでも仕出かしたか、と不安になりながらも、キンケイド氏は支社長の後について、支社長室に入った。

「君、もう長いこと帰国してないだろう？ この年末年始は家族のところに帰った方がいいんじゃないか？」

「……そ、それはクビだということでしょうか？」

「いやいや、クビだなんて、とんでもない。年が明けたら、すぐに戻ってきて仕事を続けてくれ。」

どういった風の吹き回しだろうか、棚からボタ餅と言

っていいようなタイミングで、ミスター・キンケイドは

ここ何年も取っていなかった休暇をいきなり与えられて

しまったのである。それも、支社長直々に。

その日遅く、彼は自分の家（結構豪華なワンルームマ

ンション）に戻るなり、LAにある自分の家の電話番号

をダイヤルした。もちろん、国番号も忘れずに。

なぜか、電話はなかなか繋がらなかった。彼は時差を

計算してみた。今頃、向こうは朝のはず。息子を学校に

送っていつてるのか？ いや、今はもう冬休みだからそ

れはない。二人揃って朝寝坊しているのか？ それはあ

り得そうだ。

『ハロー、ジェイソン・ヒックス&TPファンクラブです。』

やっと繋がったと思ったら、そう言われた。

「申し訳ありません、間違えました。」

彼は慌てて電話を切った。ダイヤルし間違えたのだろうか？ 自分の家の電話番号だが、長らく電話していなかったし。まさか知らないうちに、妻と子供は引越してしまっただろうか？ 何かあって、電話番号を変更したとか……。

急に、妻子のことが心配になって、居ても立ってもいられなくなったキンケイド氏であった。今晚のうちに荷物をもとめて、明日の朝、キャンセル待ちをしてもアメリカに帰らなくては！

それまでに、妻と子供の名前と顔を思い出さなくては！

会社を早退したクツワダさん操る禅の哲学と、マードックの勝手気ままな屁理屈の対決が、とにもかくにも終盤を迎えたのは、午後からそろそろ夕方に向かうという時刻であった。

（前略）ふむ、貴殿は、それを妄想と申されるか。そもそもこの場合の妄想とは、何を意味されるのか。」

「えっとね、だから、あなたの話だと、キリンの首が長いのは、高いところに生えてる木の葉っぱを食べるためでしょ？ 俺が言いたいのは、何で葉っぱの方からキリン

に歩み寄らなかったのか、ってことなのよ。ね？ あなたの言う、共棲とか、地球が丸ごと一つの生命体だ

いうなら、キリンに協働して木の枝を垂らすとかしてもいいはずじゃん？ だからさ、俺の説だと、キリンの首

が長いのは、生活の利便のためじゃなくて、その方が女の子にモテるから……。」

「いや、その説も違うぞ、モンキー。キリンの首が長いのは、ミセス・ハイデンのザウアークラウトを混ぜやすいようにだ！」

「何？」

「何だって？」

一心不乱に問答を続けていたマードックとクツワダさん、いつの間にか部屋に入ってきて、焦れつつ展開を

見守っていたハンニバルの存在には全く気づいていなかった。ので、大層驚きましたとき。

「とういうわけで、あなたの依頼は終了。これにて、ドロソ。」

ハンニバルは、強引にそうやって話を締め括ると、呆気にとられるクツワダさんを残し、マードックの腕を引っ張って部屋を出た。

「まだ話の途中だったのに！」

と、お冠のマードック。

「そう言うな。依頼はまだ残ってるんだ。キリンの話の続きがしたきゃ、ハイデンさんの奥さんとやれ。ザウアークラウト作りながらな。」

ザウアークラウトを作るためのキャベツは、包丁で切れるような代物ではない。専用のキャベツ削り器で削るのである。

ハイデンさん宅のキッチンでは、足を肩幅に開いたマードックが、ガシユッ、ガシユッ、とキャベツを削っている。何も言わず、ただ黙々と。言わずもがな、その頭の中ではキリンの首について考えている。

もしかしたら、葉っぱの方からの歩み寄りがあったのかも。でも、キリンに歩み寄った先進派の葉っぱは、キリンの口に入る前に、オカピに食べられちゃった。オカピによって淘汰されちゃった気のいい葉っぱたちを思い、オカピになんて食べられてなるものかとキリンは背が高くなった。背が高くなったら、当然、首も長くなきゃバランスが取れないし、女の子にもモテない。高いところからオカピを見下ろすつてもいい気分だしね。背が高くなって足が長くなったら、オカピより速く走れるようになったし。つてことは、キリンは思いやりとプライドとで首が長くなったつてことか。舌が長いのも、オカピにあかんべーして見せるためだ！ 睫毛が長いのも、オカピの攻撃から、あのつぶらな瞳を守るためだしね。ああ、なるほどねえ、自然って上手くできてるよ。ところで、あの黄色地に茶色のブチって柄は、もしかしてバナナ？ キリン発祥の地にはバナナがたわわになつてたつてこと？

ザシユッ……。

マードックの手が止まった。と、その途端。

「休んでる暇はありません！」

横からミセス・ハイデンの声が飛んできた。彼女はガスコンロに向かって、鍋一杯のビネガーにスパイスを調合して加えているところだ。そして、さらにその横では、ミスター・ハイデンが広口ガラス壺を煮沸消毒している。因みに、ハンニバルはタクシー運転手の仕事に戻りました。

こうしてマードックは再びキャベツ削り。

ザシユッ、ザシユッ、ザシユッ。

バナナつて言ったら、熱帯だよなあ。キリンは元々は熱帯の動物で、バナナのプランテーションの中であの柄を獲得したとなると、一体何を夢見てサバンナなんかへ引越したんだ？ キリンがいる……バナナがある……キリンがいるのにバナナはなくなつていない……キリンは元々はバナナが嫌い？ キリンはバナナ食べるよなあ。俺っちがこないだ動物園にみんな（精神病患者ご一行様）と一緒に行った時には、キリンはまずバナナを狙ってきた。あれは……バナナを食べたかつたんじゃなくて、バナナをこの世からなくしちゃいたかつたのかも……そうか、バナナの柄になつちまったものの、キリンはバナナを憎んでるんだ。いや、バナナの柄になつちまったからこそ、バナナを憎んでる！ バナナのない世界に行きたかつたんだ！ バナナのない世界で、かつ、オカピがいなくて……どうだ？ バナナがないとこ……バナナはどこにでもあるもんなあ……。

ザシユッ……。

マードックの手が止まった。と、その途端。

「キャベツはまだまだあるのよ！」

ミセス・ハイデンが杓文字で段ボール箱をビシツと示した。箱一杯の超強固キャベツ。石膏で作ったハンドボールにも見える。

「わざわざドイツから空輸させたんですからね！」

そこまでしてザウアークラウトを手作りしたいのか、とも思うが、市販のザウアークラウトでは納得できないのだろう、現地の人。特に、現地出身のご年輩は。

……ドイツ？ そうだ、東ベルリンだ。バナナもオカピも存在しない世界、キリンと葉っぱにとつてのパラダ

イスは東ベルリンなんだ！

共棲の話からだいぶズレてしまつてはいるが、マードックは一つの結論に達することができた。

（当時はまだベルリンの壁があり、東側ではバナナもチョコレートも手に入らなかつたそうな。）

そうして哲学的思考(?)に一応の決着を見たマードックが、やつと石、もといザウアークラウト用キャベツ削りに本気になつた頃、ベランダではコングが、ドリルを手に奮闘していた。傍らにはハイデン氏。

「畜生、何てボロいベランダなんだ。」

と、コング。ベランダの古い手摺を引っこ抜き、新しい手摺の支柱を埋めるべくコンクリにドリルで穴を開けようとしているのだが、何せ築三十年以上の古いコンクリート。真つ直ぐに掘ると、周りが崩れ、ベランダ自体が今にも崩壊しそう。

「これ、専門の業者に頼んだ方がいいんじゃないのか？ こまで壊れてたら、管理費で直してくれるだろ。」

「いや、無理じゃな。」

と、ハイデン氏。

「そいつあまたどうしてでい？ こんだけブツ壊れた、しかも粗悪なコンクリのベランダを放置しておいて事故でも起きちゃあ、管理会社の責任問題になるんじゃないのか？」

「ああ、普通のベランダじゃたらな。」

「普通のベランダなら？ そりゃどういう意味だ？」

「言葉の通りじゃ。ここは普通のベランダじゃない。下を見てみい。」

言われて下を覗き込むコング。下には遊歩道。そして遠くに海。格段、変わり映えのしないベランダからの景色である。

「何も変つたところはねえぜ。」

「もとい、横を見てみい。」

「横？」

と、左右を見回すコング。右横にはマンションのゲート、左横には向こうの山。別に変つた風景ではない。

「何でい、何があるつてんだ？」

「ある、んじゃない。ない、じゃろう。」

「ない？」

「ああ。見えるべきものが、ないじゃろう。」

「見えるべき……オイ、何だつて!？」

「コングは、ベランダの左端に走り、手摺のないベランダからそつと身を乗り出した。」

「わかつたかのう、ないものが。」

「隣のベランダがねえ。」

「ご名答。フオッフオッフオッフ。このベランダは、元からあったベランダにわしが建て増しをして作ったんじゃない。だから、お隣のベランダからは、ま、余裕で二メートルは前にせり出しておるな。」

「言われて、左を見るコング。確かに、遙か後方に隣のベランダが見える。」

「てことは、元あったベランダ、どうしたんだ?」

「元あったベランダの手摺の位置にな、そのー、チョイと壁とサッシとガラス窓とをつけて部屋を広げたんじやよ。ま、ベランダなぞ、あつてもなくても構わなくて。それより部屋が広い方が何かとよかろうと思つてな。ところが、女房の奴が、工事が終つてから、やつぱりベランダは必要ね、などと言ひ出しよつて。」

「で、なくてもいいはずのベランダを、爺さんが手作りしたつてことか。」

「そういうことじゃ。なかなか上手くてとるじゃろ? その、手摺と排水管を除けば。」

「そりゃ排水管も詰まるぜ。これだけグイッと曲がつてればな。」

「と、ベランダ(手摺なし)に膝をつき、身を乗り出して下を見るコング。コングの足元で、ミシリと嫌な音がした。」

「あーあ、排水管、水平んなつてるとこがあるぜ。これじゃあ、水も流れにく……。」

ベキベキッ。

「コングの体重に耐えられなくなった粗悪コンクリが、一部崩れて階下に落下した。青褪めるコング。」

「おいおい、壊さんでくれよ。せつかく作ったベランダを。」

「……そう言われても、身動きしたら本格的に崩れそうだけ。」

ベキベキッ。また崩れる足元。

「おわつ。」

「コングの膝下が崩れた。空中に放り出される右足。」

「ゆっくりじゃ、ゆっくり、立たんでいい、立たんで、そのまま向きを変え……。」

ベキベキベキ、ベシヤーン!

そしてミスター・ハイデンの言葉が最後まで終わらないうちに、ベランダはコングもろとも崩壊した。

ミスター・ハイデンは、爺さんらしからぬ素早さで一步下がりに、ベランダ崩壊の巻き添えにならずに済んだ。窓枠に立ち、階下を見下ろす。

そこ、つまり、一階の庭では、コンクリの瓦礫からコングが悪態をつきながら這い出してきたところだった。

「大丈夫かね?」

「おう、何とかな。」

「コンクリの粉を被つて真っ白になったコングが、二階を見上げて答える。それからコングは周りを見回した。何とここは、キム宅の庭。せつかく拭いた窓ガラスが、コンクリの粉塵を吸着してしまっている。そして、この庭の手入れが途中だったことを、コングは思い出してしまった。今となつては、手入れより先に瓦礫を片づけなければいけないだろうが。」

「君たちへの依頼、変更しても構わんかのう?」

「ベランダの、復元、だな。」

「その通り。」

「コングは溜息をつくしかなかった。」

キッチンに戻ったミスター・ハイデンによって、無事に壇の煮沸消毒はすべて終わり、ビネガーを調合し終わったミセス・ハイデンは、現在、削り終えたキャベツを壇に詰めている真つ最中。ベランダがなくなつてしまつたことにご立腹中なので、彼女、無口である。

その横には、最後の一個のキャベツを削っているマードック。彼もまた、無口である。生まれてこの方、これほど右腕を前後させたことがあつたらうか。それも、力任せに。この作業はむしろコングがこなすべきだったのではないだろうか。

あとちよつと……あともう少し……あとほんのちよつと……

「終わったーつ!」

「ご苦労さま。」

低い声でミセス・ハイデンが言った。壇にキャベツを詰めた後、ビネガーを注いで軽く蓋をし、もう一度煮沸消毒をしてから、熱いうちにぎゅつと蓋を閉じる、という過酷な作業をしながら、である。何が過酷つて、熱いのだよ、壇が。

「あとは私一人でできるから、もういいわ。どうもありがとう、坊や。」

マードック坊やお婆ちゃんにリコリスのソフトキヤンディを貰つてキッチンを出て、リビングに顔を出した。揺り椅子に腰かけて分厚い本を読んでいたミスター・ハイデンが、マードックの姿を視野の端に捉えて、顔を上げた。

「ああ、終わったかい、ご苦労さん。モヒカンの彼が、君が来たら、下に来るように伝えてほしいと言つとつたぞ。」

「あ、ども。」

そして今回結構まともに仕事をこなしているマードックは、リコリスキャンディをくつつやくつつや食べながらハイデン宅を出ていった。

一階に行つてみると、見覚えのあるキム宅の荒れた庭で、コングがコンクリの瓦礫を麻袋に詰めては運び出しているところだった。キャベツを削っている間に何があつたのか、聞くまでもなかった。二階のベランダがなくなつている。その真下にコンクリの瓦礫がある。この状況を見て、「キャットショーが行われていたんだな」とか「キャンプファイアの準備かな」とは誰も思ひない。マードックでさえも。

「やつと来たか。」

黒白まだらのコングが、額の汗を腕でぐいつと拭つた。

「その窓、拭いといてくれ。それが終わつたら、庭の手入れの続きだ。」

有無を言わせず、マードックに指示を下す。

「コングちゃんは?」

「俺ア、この瓦礫を片づけたら、爺さんちのベランダの復元だ。」

マードックはハイデン宅のベランダを見上げて、ああ、と頷いた。こんな時こそ、キリンがいればいいのに。

マードックがクツワダさんを誘って、二人で禅問答（最早キリンに関する口論）をしながら窓を拭いている間、エヴェレット氏に未だ解放されずにいるフェイスマンは、とりあえずミントジェリーのバスタイムを終了させてもらって（ふやけるので）、今度は何がどうしてそうなったのか、メイド服を着せられていた。それも、床のカーペットの上にペタンコ座りさせられて、両手は前で軽く縛られて。

そんな折、エヴェレット宅の裏庭に続く窓がダンダンと叩かれた。

「おい、フェイス、まだそこにいやがるのか？」

コングの声が響いた。

「ああ、いるよー。」

エヴェレット氏の指がカメラのシャッターボタンに乗っていない瞬間を見計らって、フェイスマンは返事をした。

「その仕事終わらして、早えとここつち手伝ってくれ！」

「わかったー。」

フェイスマンは、エヴェレット氏（頬を激烈に紅潮させておられる）に両手を差し出した。

「俺、もういいよね？ 解いてくれる？」

やけにハアハアしているエヴェレット氏は、カメラをテーブルに置くと、フェイスマンに近寄っていった。そして……

「テンブルトーン！ 君は素敵だ！ 辛抱堪らん！」

と、フェイスマンを床に押し倒した。その途端。

ゴキッ！ ドタンッ！

解説しよう。フェイスマンとて百戦練磨の猛者。生っ白いかメラマンなんか黙って押し倒されるわけもない。縛られたままの両手でエヴェレット氏の顎にアッパーを食らわせ、ガラ空きになった襟元を掴んで巴投げ。それも、無意識に。

「ゴ、ゴメン。急に押し倒すから、つい……。」
起き上がってエヴェレット氏を見ると、ぼったりと仰向けに倒れた彼の頭の上では、ヒヨコがビヨビヨと輪になって回っていた。

「ゴメン、ホントにゴメン。俺、もうモデルやったから、いいよね？ ね？ じゃあね！」

緩んだ手首の縛めを自力で外し、フェイスマンはエヴェレット氏のスタジオを清い体のまま(?)脱出することに成功した。しかし、メイド服姿で。だって、現在フェイスマンはとも眠くて頭が回ってないんですもの。それでも寝に戻ることはせず、キム宅の庭に回ったのがフェイスマンの律儀なところと言えよう。

「こっちは終わったよ、って、何してんの？」

窓拭きに勤しむマードックとクツワダさんを見て、フェイスマンは目を丸くした。

「見りゃわかんだろ。窓拭き、と、禅問答の続き。」

「だって窓は拭き終わったはずじゃ……。」

「また汚れたの。」

マードックは、瓦礫を粗方運び出したとは言え、まだ白っぽい粉塵の残る庭と、上で崩壊したベランダの状況を調べているコングを指差した。

「なるほどね。」

納得するフェイスマンに、上からコングが怒鳴る。

「フェイス！ このベランダを修復する建材を調達してきてくれ。」

「OK。必要なものをリストアップして。」

モデルの疲れも何のその、フェイスマンは俄然張り切った。ここ数日の全く不本意な仕事の数々に比べれば、自らのスキルに合った依頼だ。少なくとも、エアロビやモデルより、ずっと合ってる。

「ついでにアレも片づけてくるよ。この冬流行のジュエリーを半額以下で手に入れるってやつ。」

依頼書を見た時から密かにやりたかった仕事を挙げ、フェイスマンは早速出かけようとした。その服の裾をマードックが掴んだ。

「ちょっと待って、フェイス。出かける前にさ。」

「何？ まだ何かあるの？」

「その服、脱いで置いてってくれない？」

マードックが指差したのは、エヴェレット氏に着せられたフェイスマンのメイド服だった。

「そうだ、こんなの着て出かけられないよ。」

とは言え、それまで着ていた服はエヴェレット氏の部屋に置いてきてしまったし。そこで、フェイスマンは一旦部屋に戻り、着替えることにした。

そして、なぜかのこのこついできたマードックは、フェイスマンが脱ぎ捨てたメイド服を着始めたのである。と言っても、チノパンにTシャツの上からだから、シルエットはかなり怪しい。さすがに上着は脱いでいるが、よくも入ったものだ。

「何でそんなの着るんだよ！」

思わず赤面するフェイスマン。人に着られて初めて、それまでの自分の格好を自覚したのだ。しかし、マードックはむしろご機嫌で、鏡の前でくると回って見せた。「そりゃ窓拭きと来りゃメイドの仕事だろ？」

「全く同感だ。」

これまた、なぜかジェイソンの部屋までついて来ていたクツワダさんがゆったりとした地味な拍手をする。

「次の問答のテーマはメイドにしよう。」

それは最早禅問答とは言えないと思う。いや、最初から言えなかったけどさ。

「おつ、いいねえ。そいじゃ、窓拭きの続きをしながらやろうぜ。」

すっかり意気投合したマードックとクツワダ氏、窓拭きを続行するためにキム宅に戻っていった。

実は既に夜（お忘れかしらんが）。急がないと、ジュエリーショップは閉まってしまふ。ホームセンターも閉まってしまふ。

調達リストをコングから受け取ったフェイスマンは、ダウタウンへの道をテクテク歩いていた。コングがバンを貸してくれなかったからだ。自分のコルベットをダウタウンの駐車場に置いてきてしまったのが悔やまれる。

と、そんな矢先、運よく一台のタクシーが近づいてきて、フェイスマンは右手を掲げた。俗に言う「ハイ・タクシー」のポーズである。

タクシーは滑らかにフェイスマンの前に停まり、ドアが開いた。

「ダウンタウンまでやって……って、ハンニバル、何してんのこんなところで！」

そのタクシーの運転手は、言わずもがな、ハンニバルであった。

「何って、仕事ですよ。運転手代行のね。で、ダウンタウンまで行けばいいの？」

「うん、頼む。」

「金は払えよ。」

フェイスマンは言葉に詰まった。タクシーの運賃を払うつもりなど毛頭なかったからだ。運転手がハンニバルじゃなかったら、何だかんだ言って金を払わずトンスラしてしまおうと思っていたのに。

車は、フェイスマンの指示通り、ダウンタウンに向かって発進した。目的地に到着するまで、フェイスマンは事態の報告を強いられたのであったとき。

ピンポン。

キンケイド家のドアチャイムが控え目に鳴った。

「はい？」

インターホンを取ったマリアンは、一睡もしていないく不機嫌。目の下には黒々とクマ。

『あのー、ユリアです。オリバーいますか？』

微かな声が聞こえて、マリアンはリビングでWTPPの案内状を封筒に詰めていたオリバーに声をかけた。

「ユリアが来たけど？」

「ユリア？ 一緒に遊んでいい？」

「案内状は？」

「あと十ぐらいで終わる。終わったら遊んでいい？ それまで、ここで待ってもらっていい？」

「終わってからならいいわ。でも、ここ（リビング）はこんな状態（修羅場っぽい）だから、遊ぶなら自分の部屋で遊んでよ。」

「うん、わかった！」

オリバーは、椅子からびよいっと飛び下りると、玄関目指して駆けていった。そして、ユリアを連れて自室に入り、「ここでちょっと待っててね」と言うと、リビング

に戻ってきて、急いで残りの案内状を封筒に詰めた。

ここまでのオリバーの言動からおわかりのように、オリバーはユリアにホの字なのである。緩くカールした漆黒の髪に、黒曜石のようなつづらな瞳、それを縁取る長い睫毛、それだけで十分魅力的なのだが、何よりもオリバーが気に入ったのは、ユリアが物静かで口数が少ないことだった。マリアンとキムに囲まれて育てば、物静かな女の子に好意を抱くようになってしまっても仕方のないことだ。

さくつと作業を終えたオリバーは、オレンジジュースとスナックを手に自室に籠もった。と思うと、オリバーはドアから顔だけを出して、マリアンに言った。

「ヤンソン・ブラザーズの誰かが来たら、僕はおたふく風邪かもしれないって言っといてね！」

同じマンションに住む子供同士、いろいろあるようである。

「あ、それから！」

再度オリバーが顔を出した。

「もうすぐ夕飯だよね？ ユリアの分も作ってね！」

オリバーはマリアンの血をきちんと引き継いでいるようであることよ。

こうしている間にも、実は引つ切りなしに電話がかかっている、マリアンはその応対に追われていたのであった。夕飯作ってる暇ねえなあ。

「そうだ、マリアンとオリバーだ！」

キンケイド氏はアブダビのマンションで歯を磨きながら、彼の妻と息子の名前を思い出すことに成功した。

既に一時帰国のための荷造りは終えた。数時間後にアブダビを離陸する飛行機のチケットの予約も入れた。あとは服を着て空港に向かうだけだ。そして、何も問題が起きなければ、十九時間と五十五分後にはロサンゼルスに到着し、そこからタクシーでちょっと行けば、妻子の許に帰り着けるはずなのである。問題が起これなければ、だが。

二十四時間もすれば旦那が帰ってくるなど露知らず、マリアンとそれからオリバーとユリアは、ジェイ

ソン宅で夕食の席に着いていた。その食卓を囲むのは、当然コングと、なぜかクツワダ氏、ミスター・ハイデン、それと、独りぼつちで寂しいマスナンさん。因みに、キムは仕事で、ハンニバルもフェイスマンも仕事で。エヴェレット氏は、もしかすると未だ気絶中。

「はいよー、お待たせー。」

妙なイントネーションで言いつつ大皿を持ってキッチンから出てきたのはマードック。その後ろに、ミセス・ハイデンが続く。

「固くないキャベツ一杯のホイコーローねー。こっち、フヨウハイねー、カニはフェイクだけどねー。こっち、チンジャオロースーねー。それと、ブロッコリーの炒めねー、ちよつちガーリックキーで臭いねー。」

テーブルの真ん中に大皿を置くマードック。ミセス・ハイデンはライスとスープを配って回っている。本日の夕食、調理主任はマードックだが、ブロッコリーしかなかったため、みんなで材料を持ち寄ってくれたのだ。

「いただきます！」

率先して食べ始めたのは、誰あろう、マリアン。

「これは美味しい！ ヨコハマのチャイナタウンを思い出すよ……。」

上手に箸を使って食べるクツワダ氏はヨコハマ出身であろうか。

「ほう、こりゃ美味しい。おい、お前、作り方を教えてもらっておけ。」

「言われなくとも、坊やがお料理してるの、ちゃんとしてましたよ。」

ハイデン夫妻もマードックの中華料理を気に入ったようだ。

「こんなことなら、『毎食、食事を作ってくれ』って依頼を出すんじゃないなあ。」

マスナン爺さんが陽気に言う。連れ合いを亡くしてから、まともなものを食べていなかったんじゃないだろうか、と思うと、結構胸が痛むのだが、幸い、この場の誰も、そのことに気づいていなかった。

「みんな、どんどん食べてねー。」

そうマードックは言うが、言われなくても食べている面々である。コングは、マードックの食事に慣れている

ので、特に意見はないようだ。

ユリアにフヨウハイを取ってあげたオリバーが、彼女の目がうるうると潤んでいるのに気がついた。

「どうしたの、ユリア？ 嫌いなものでもあった？」

「ううん。」

「辛かったかな？」

「ううん。」

「頬っぺたの内側噛んだ？」

「ううん。……あのね、私ね、ご飯みんな食べるのっていいなって思ったの。いつも独りだから……。」

「そりゃわしもそう思ってたところじゃわい！」

「マズン爺さんがユリアに同意する。」

「私も、そう思っていました。」

クツワダ氏も。このマンション、寂しい人が多かったようです。

「なら、俺たちがここにいる間だけでも、みんなここで食事すりゃいいじゃん。材料さえありゃあ、俺っちは料理すんの嫌いじゃないし。」

「マードックが大きく出た。いい気になってしまったらしい。他にもすべき仕事はあるだろうに。」

「なあ、コングちゃん？」

問いかけに、コングは白飯を掻き込みながら頷いた。

「そう言ってくれると助かるわあ！」

「マリアン、別にあんたは寂しくないだろ、とは誰も言えなかった。」

別にファミリーでもない人々の、一家団欒のデザイナータイムが終わると、ジェイソン宅のリビングは修羅場と化した。なぜなら、マリアンがWTPPの作戦本部をここに移したからだ。

クツワダ氏とミスター・ハイデンがキッチンで大量の食器を洗っている間、マズンさんとミセス・ハイデン、なぜかコングとマードックまでもがリビングに集合させられ、司令官マリアンの号令一下、仕事を割り振られつつあった。

オリバーとユリアはマリアン宅に戻って、遊ぶことにした。本当は子供はもう寝る時間なのだが、いかんせん、母親のマリアンには息子の生活習慣を気にしている余

裕などない。ユリアに至っては、注意する者がいないのだから話にならない。

「ねえ、何して遊ぶ？ 僕の玩具、何でも貸してあげるよ。」

紳士振りを発揮するオリバーに、美少女ユリアは憂いを帯びた瞳で、控えめに言った。

「ありがとう、オリバー。あなたって本当にいい人ね。」

「もちろんだよ、ユリア。僕、君のためなら何でもしてあげたいんだ！」

若いつていいよね……。

すると、ユリアはさらにうるうるした眼差しで、オリバー少年を見上げた。

「あのね、オリバー。私、あなたにお願いがあるの。」

「何でも言ってみて。」

身を乗り出すオリバー。

「パパとママに会いに病院に行きたいの。ついて来てくれる？」

こんな時間に？ 子供だけで？

オリバー少年は一瞬躊躇ったが、次の瞬間にはユリアの手を取った。

「わかったよ、僕に任せておいて。きつと病院まで連れてってあげる。」

「嬉しいわ、オリバー。頼りにしてるわ。」

ユリアちゃん、この年齢にして、男をあしらう術を心得ている様子。一方、母親似のオリバー少年は、タクシーで病院まで乗りつけて、キムを呼び出せば何とかなるだろうなんて、ちゃっかり考えていたのだった。

こうして、大人たちが忙しく立ち働いている間、子供二人はこっそりとマンションを抜け出したのだった。

マリアンは自分の家に戻ってきた。ジェイソン宅に作戦本部を移したものの、WTPP関係の電話は自宅にかかってくるからだ。問い合わせ関係はこっちで受けて、その他の作業はジェイソン宅で行おう、というのがマリアンの作戦である。単に、全部の仕事を一人で背負い込みたくないだけなんだが、そんなマリアンの頭には、

「TP（≡フェイスマン）がWTPPのことに気づいたらどうしよう」などということ、ちっとも浮かんでお

りませんでした。

自分の家に戻ってきたマリアンだが、オリバーとユリアは、オリバーの部屋で静かに遊んでいるものだとばかり思っていた。もしかしたら、ユリアはコレード家に戻って就寝したかも、とさえ思っていた。楽天的である。

だが、その頃、オリバーとユリアはマンションの外を歩いていた。病院に向かおうにも、タクシードラは見当たらないし、昼間ならたまに走っているバスもこの時間では終わってしまったている。

「タクシー、来ないね。」

少し後悔しながら、オリバーは横を歩いているユリアに言った。

「こんな時、パパがいてくれたら……。」

「うん、ユリアのパパ、タクシードラの手さんだもんね。……そう言えば、昨日だったかな、おじさん（フリオ）見かけたよ。ハンニバルおじさんにお金払ってもらえなかったみたいだった。」

「その話、パパから電話で聞いたわ。その人が、今、パパの代わりにタクシードラの運転してるんですって。」

「ふうん。」

「その人のおかげで、パパはママのところについてあげられる、ってパパは言ってたわ。」

「ふうん。」

「パパは私よりママの方が大切なのよね……。」

「え、そ、そんなことないよ！」

オリバーはユリアの手をぎゅっと握った。

「だって、ぼ、ぼ、僕は、ママよりもグディよりも誰よりも、君のことが大切だし！」

ユリアの手を握ったまま、ユリアを見つめたまま、オリバーは横歩きしていく。

「だ、だからさ、ユリア、君が大人になったら、そ、その、ぼ、僕に、毎日ガスパチョ作ってよ！」

ドシン！

大告白の後、前方不注意だったオリバーは何か思いきりぶつかった。そして、子供によくあることだが、そのままコケた。ユリアは咄嗟にオリバーから手を引いたので、その巻き添えを食らうことはなかったのだが。

「いてててて。」

と、ぶつかったものを見ると、それは薄暗がりの中、測量をしている男であった。……怪しい……。

「ごめんさい、おじさん。」

「いや何、気にすることあねえよ。」

オリバーがぶつかったぐらいでは微動だにしそうもない図体である。体格はコングとどっこいなぐらいだが、身長はコングよりだいぶ高い。マードックより高いかも。「お前ら、あのマンションの子かい？」

その男は、顎でマンションの方を指して尋ねた。

「うん、そうだけど。うちに何か用？」

「今んとこは用ってほどの用はねえが、そのうちにな。」

……まあ、楽しみにしとけや。」

謎の男はそう言うと、オリバーの頭をぐりぐりと撫でた。

オリバーは首を傾げつつも、ユリアの手を取り、早足でその男から離れていった。

その頃、夜のハイウェイをひた走るタクシー一台。もちろんハンニバルである。

フェイスマンを降ろしてから数時間、順調に客を掴み、最後と思われた客をビーチまで送って、さあ帰ってディナーでも、と思ってマンションまで戻ったところで、また客が。黒づくめの服装の大男である。乗せてなるかと慌ててメーターを倒してみたものの、そのお客の眼力たるやなかなかのもの、あつと言う間にドアを開けられて乗り込まれ、ロサンゼルス国際空港まで走らされている始末。

しかしまあ、その分、運賃は稼げるし、引き受けた以上はフリオにそれなりの稼ぎを渡してやりたいし、と、気分を切り替え、客の言う通り、空港に急ぐハンニバルであった。

「遅えな、連ちゃん。もつと飛ばして行けねえのかよ。」

深夜の客は、少々柄が悪かった。

「済みませんねえ、今日は朝から、て言うかここ数日働き通しで、視力に不安が出てるもんでして、安全運転で行かしてちょうだいな。」

「安全運転だあ？ オイオイおっさん、俺アこれから空港に親分を迎えに行くんだ。うちの親分は恐いお人だな、

遅刻なんかした日にゃあ、カラフトの鱒みてえに冷凍されて解凍された上に味噌塗って焼かれちまわあ。」

「すぐに焼くなら冷凍の必要はないんでないかい？」

「うるせえ、人の揚げ足取りやがって。俺の親分はロシア帰りだ。食いモンは何でも一遍、冷凍しなきゃ召し上がらねえルイベ主義者なんだよ。いいから、さつさとアクセル踏みやがれつちゅうの。」

どっかちゅうとそれはロシアではなく北海道の風味であるが、そんなことは知ったこっちゃないハンニバル、この小うるさい客をさつさと降ろして帰って一休みしよう、と気持ちを切り替え、仰せの通り、目一杯アクセルを踏み込んだ。後部座席の男は、ギャツと言叫んでシートにへばりついた。

「や、やればできるじゃねえか。」

もちろん、やればできるのである。だってAチームのリーダーだもん。

マリアンが洪々と電話受付をしに自分の家へ戻った直後、ジェイソン宅では大きな溜息、いや、安堵の息がガツツリ漏らされまくった。

何のための作業を押しつけられたのか、マスナン爺さん、クツワダ氏、ハイデン夫妻にはわかっていたが、コングとマードックは何のためにコサーージュ作りや紙花（文化祭で飾られるアレ）作りや書き殴られた氏名住所電話番号の清書（タイピング）をやらされているのか、さっぱり見当がつかなかった。

「これ、依頼の中に入ってなかない？」

マードックがナイスな点に気づいた。

「正式な依頼じゃねえなら、俺たちが手伝わなくなったって構やしねえよな。」

コングがニヤリと笑って、作りかけの紙花を放り投げた。

「じゃ、オイラも、やめっぴ。」

と、マードックもコサーージュをポイと投げる。

「我々もそろそろ休ませてもらうとしますか。」

ミスター・ハイデンがタイプライターをチーンと改行して、椅子から腰を上げた。奥方も、それに倣う。ついでに、マスナンさんも。さらに、クツワダさんも。

「それじゃ、お休みなさい。」

「素敵なディナーをありがとう。」

口々に言って、彼らは自分たちの家へ戻っていった。そして、静かな、だが散らかった部屋に残されたのは、コングとマードック。蛇足ながら、まだ部屋の中にシートが干してある状態です、このリビング。

「これ、どうする？」

腕組みをして、コングが聞いた。顎で指し示しているのは、リビングに散乱しているコサーージュやら紙花やら紙やら箱やら何やらかんやら。

「放つときゃいいんじゃねえ？」

あっさりと言って、マードックは依頼リストに向き合っ

った。

「キムんとこの依頼は、全部終了。」

窓拭きの後、クツワダさんと共に庭掃除まで終えたマードック、ビーツとリストに消し線を入れる。

「ハイデンさんとこのペランダの件は『復元』に変更。

その進捗やいかに？」

コングの方を振り返る。

「進捗も何も、フェイスマンが資材調達から戻ってきてねえから、手もつけらんねえ。明日、枠組作って、鉄筋張って、コンクリ流して、固まんに最低七日はかかるな。」

「年明けちまうぜ？」

「こればかりは仕方ねえ。」

ふるふると頭を振るコング。

「だが、待ってるだけだから、その間、別の依頼をこなせるぜ。」

「あー、じゃこれだ。ミラーさんとこの、バスルームの排水管が詰まりかけてるので直してほしい件。これ、コングちゃんの担当でいい？」

「てめエは？」

「二階のアントワネットさんちのパッチワーク。どう？」

「ああ、きつと適任だな。」

「アントワネットさんちからは、掃除の手伝いの依頼も来てっから、それも並行して。」

「任せた。」

「ミラーさんここからは、迷子になったペットを探してほしって依頼も来てっけど、どうする？」

「そりゃ、てめエの十八番だろ。」

「へいへい、了解。俺っち、大忙しだね。」

取りあえずの分担を決定し、大忙しなマードックは明日の朝食の下拵えをしにキッチンへ、粉塵に塗れたコングはバスルームへと向かった。

その頃、オリバーとユリアは、病院への道をひたすら歩いてきた。徒歩で行けば一時間以上はかかる道、しかも深夜である。子供ら二人だけは、さぞ心細いに違いない。……というのは大人知恵の浅薄さというもの。実は結構楽しんでしまっているお子様たちである。

何せ、夜なのだ。普段だったら外出すら許されない。しかも、子供だけ！ しかも、大好きな友達と一緒に！

というわけで、オリバーはゴキゲンだった。

「そうなんだよ、僕のダディはね、アブダビにいるんだ。」

「アブダビって、アリババがいるところ？」

「そうそう。あのね、アブダビでは、自動ドアを開ける時に『開けゴマ！』って言わなきゃいけないんだよ。言わなきゃ開かないの。」

「面倒臭いわね。」

「そんなことないよ、楽しいよ。」

「そう。」

心ここにあらずで相槌を打って、ユリアは溜息をついた。

さつきから足が痛いのだ。買ったばかりのサンダルは、長歩きに向かない華奢なデザイン。というわけで、現在のユリアはあまりゴキゲンではない。

「でね、アブダビには王様がいて……あれ？ ユリア、どうしたの？」

急に立ち止まったユリアを振り返って、オリバーが聞いた。

「足が痛い。」

ユリアは、正直にそう答えた。

「足？」

「うん。」

と、右足をオリバーに突き出すユリア。サンダルの小指が当たる場所が、うっすら血に染まっている。

「大変だ！ 怪我してるじゃないか！ ええっと、こういう時は。」

しばらくオロオロしてから、オリバーは、ユリアの前に跪いた。尻ポケットからハンケチを探し、ユリアの足を包む。白いハンカチは、ユリアの血でうっすらとピンクに染まった。

オリバーは、ハンカチの端と端をギュッと結ぶと、「これでよし」と一人ごち、そしてクルリと後ろを向いた。

「乗って！」

しゃがんで両手を後ろに伸ばした姿勢で、オリバーは言った。

「え？」

「おんぶするから。乗って！」

「え、でも、私、あなたより大きいわよ、かなり。」

「いいから、大丈夫！ こう見えても力あるんだよ、僕。さあ！」

自信満々なオリバー。ユリアは、おずおずとオリバーの背中に押しかかり、首に手を回した。

「ぐえええ。」

オリバーが変な声を上げた。ユリアの腕が首に入ったらしい。

「あ、ごめんなさい。」

気づいたユリアが手を離れた。咳込みながら立ち上がろうとしたオリバーは、予想していたよりだいぶ重いユリアの体重に、ぐっと沈んだ。

「ホントに大丈夫？」

「大丈夫。ぬぬぬぬぬ……。」

オリバーは、気合いを込めて立ち上がった。生まれ立ての子馬のように何度かよめいた後、何とか体勢を立て直してヨロヨロと歩き始めた。

病院は、まだ遠かった。

この冬流行のジュエリーと、秋に流行していたジュエリーと、さらに、春に流行しそうなジュエリーを格安で手に入れたフェイスマン。もちろん、どれも本物そっくりだが贋物である。フェイスマンさえ、ちよつと見では本物と贋物の区別がつかないほど、そっくり。でも、値段からすると贋物。一般小売価格二千ドルのはずのペンダントトップが二十ドルなんだから。「半額以下」どころの値段ではない、百分の一だ！

さすが裏の倉庫で買うと安いなあ、と、ホクホク顔のフェイスマンは、お次にホームセンターの在庫が眠る倉庫の鍵をちよちよいと開け、必要な品を揃えた。

なぜフェイスマンがこんな違法行為に及んでいるかと言うと、単に、ホームセンターが閉まっていたからだ。閉店間際の店に盗みに入るのなら、どうせジュエリーの件で倉庫街まで行かなければならないのだから、倉庫からいただいでしまおう、という魂胆であった。用意周到に、建材を運搬するためのトラックまで、そこいらからちよろまかし済み。

眠いけれど非常に充実感を得て、フェイスマンはトラックに乗ってマンションに戻っていった。

途中でフェイスマンは、小さな影がふらふらとしているのを見た。細い二本の足、それに比べて大きな上半身、頭らしきものが二つ、手らしきものが足と同じ高さから二本生えている。

「未確認生物ってやつ……？」

怖くなってアクセルを思いきり踏み込んだフェイスマンであった。

マンションに到着したフェイスマンは、建材を駐車場に下ろし、再度トラックに乗ってダウンタウンへ。盗んだ車にいつまでも乗っているとバレルからね。元あった場所にトラックを戻し、そこから自分のコルベットがある駐車場まで徒歩で。そして、コルベットに乗って、まともなマンションへ。ちよろど、山の方から太陽が昇ってこようとしているところだった。

今度は未確認生物にも出会わず、無事マンションに到着したフェイスマンは、ジェイソン宅に戻り、キッチンに残っていた中華料理を立ち食いし、シャワーを浴びて、やっとこさベッドに潜り込んだ。

それより数時間前。ロサンゼルス国際空港で、ハンニバルは待たされていた。先刻乗せた客によって、だ。そ

の分の代金は払ってくれると言うので、その頼みを快諾したのだが、タクシー乗降場でなく駐車場に停めたタクシーで待っても待っても客は戻ってこない。ここまでの運賃と、待っている間の代金と、駐車料金は、前金で貰っているのだから、乗り逃げというわけではない。何か事情があったのだろうか。待っている間に仮眠を取ったハンニバルは、ここでただ待っているのも性に合わないので、車を降りて空港の到着ロビーに向かった。

客は、難なく見つかった。大きな背を丸め、アルミの柵に両肘をついて、電光掲示板を見つめている。

「親分さんはまだなのか？」

「あ、ああ……。」

ハンニバルの声に一瞬ビクッとした黒服の男だったが、振り返って、声の主がハンニバルだとわかると、安心したように、しかし不安そうな声で言った。

「親分の乗った飛行機が遅れてるんだと。」

「ほう。」

飛行機の到着が遅れることなど、まあ普通にあることだ。遅刻した客が離陸直前に駆け込むとか、ちよつとしたメカニカルなトラブルで離陸が遅れるとか、天候の具合とか、理由は様々。

「お宅の親分さんは、どこ発のどれに乗ってるのかな？」

ハンニバルも黒服の男と並んで、電光掲示板を見上げる。(未だバジャマ姿なのをお忘れなく！)

「あの、アブダビ発ってやつだ。本当なら、もう一時間前に到着してるはずだつてのによ……。」

「アブダビ？ ロシアじゃなかったのか？」

「出身がロシアで、アブダビには仕事で、ちよつとな。」

「石油関係か何かやってんのか、親分さんは。」

「いや、レジャー開発だ。主に避寒地のな。」

年中暖かいロサンゼルスに居ついているハンニバルには、「避寒地」と言われても、何となく理解し難い。

頭では、「寒い地方の人が、暖かい所に太陽を求めてやって来る」とわかっていても、体が納得してくれない。

「アブダビってのは、観光できるようなところなのか。砂漠と石油ばかりだと思つてたが。」

「俺も写真でしか見たことねえが、海がすげえ綺麗だつ

たぜ。太陽がキラキラしてよ。」

「ほう。ビールが美味そうな所だな。」

「ああ、ハクイスケ連れてな。」

「いいですねえ、それ。」

「だろ。そういうところらしいんだよ、アブダビってのは……それにしても遅えな。何かまずいことでも起こつてんじゃないかねえか？」

「何かアナウンスは？」

「到着が遅れてる、つてだけだ。理由も何も言われてねえ。」

「……臭いすな、こりゃ。」

それより一時間半ほど前、アブダビ発ロサンゼルス着の直行便では。いや、そのトイレの前では。

「二つしかないトイレの一つが清掃中っていうのは、一体どういう了見なんだろうね？ トイレの掃除なんていうのは、客がいない間にやるもんじゃない？」

トイレに並ぶ男が二人。大声で苦情を堂々と言っているのは、ロシア出身のイワン・ストコドコイ。小柄でインテリ風のオデコ。黙って微笑んでいれば可愛らしいのだろうが、非常に不機嫌そうな表情で、口数は多い。その後ろに並んでいるのは、ミスター・キンケイド。背はそこそこ高く、体格も悪くはない。薄茶の巻き毛と緑色の瞳で、人並以上の容姿ではあるものの、きりつとした雰囲気は皆無。何となく影が薄い。

「緊急の掃除じゃないでしょうか？ たとえば、さつき利用者が、零したとかしくじつたとか振り撒いたとか。」

「そりゃあ、緊急に掃除が必要だね！」

と、その時、中に入っていた利用者が出てきて、それと同時に、隣のトイレも清掃が終わった。

「それじゃ、お先に。」

「私はあつちに。」

二人でトイレに入り、ドアを閉めようとしたその瞬間、

客室の方で叫ぶ声が聞こえた。

「この飛行機は、我々『マザー・アース友の会』が占拠した！ 全員、シートベルトをして、両手を頭の後ろに

組め！」

トイレの鍵を下ろした二人にも、その声は聞こえていた。別々の部屋で、二人は同時に「ハイジャックなんて今時ないよなあ」と案外冷静に思つたのだった。

その頃、市立病院はてんでこ舞いだった。どうやら近くの中華料理屋で食中毒が出たらしく、腹痛と吐き気を訴える患者が次から次へと夜間診療を訪れ、受付前には長い列ができていた。

今夜の当直は、一昨日研修医を卒業したばかりの新人医師アーノルド(通称アーニー君)と、ベテラン看護師のキムである。生まれ立てのウサギのように頼りないアーニー君と、根拠なく恐いものなど何もない感じのキム。バランス的にはとてもいい感じ？

ア「えー、どうしました？」

患「お腹が痛くて。」

キ「何を食べたの？」

患「海鮮焼きそば。」

キ「大したことないから、点滴打ったら帰つてね。はい、次。」

ア「どうしました？」

患「お腹が痛くて。」

キ「何を食べたの？」

患「エビチリ。」

キ「あ、それはダメね、入院。次。」

患「エビそば。」

キ「入院。」

患「炒飯。」

キ「それ、ただの食べすぎ。帰つて。」

患「エビのマヨネーズ和え。」

キ「入院。」

どうやら食中毒の症状の重さは、食べた食品のエビ含有率にかかっているらしい。テキパキと患者を捌くキムとアーニー君(「どうしました？」しか言っていないけど)。二人が、二十五人目の入院患者を入院病棟に送り込んだところで、入院病棟の方からストップがかかった。ベッドが足りなくなつたらしい。

「どうしよう、キム。ベッドが足りなくなつたからと言って、重症の患者さんを帰すわけには行かないよ。」

「そうね。それじゃ、軽症の患者さんには、退院してベッドを空けてもらいましょう。」

と、入院患者リストを捲るキム。

「ええと、ジャクソンさんは盲腸の手術したばかりだからあと二日は入院が必要ね。ディマルコさんは心臓のバイパス手術後か。うーん、みんなすぐには退院させられそうもないわね。」

そりゃそうである。だから入院してるんだし。と、リストを捲るキムの手が止まった。

「あ、この人がいいわ。ただのお産だし、予定日過ぎてるし。助産師さん一人つけて家に帰しちゃいましょう。」

「そ、そんなことして大丈夫なの？」

と、アーニー君。

「平気よ。この人、うちのマンションの人だもの。きつと理解してくれるわ。」

というわけで、ユリアの到着を待たずして、ガブリエラ・コレードは強制退院させられることになったのである。

「ひ、久しぶり……振りの、はうっ、わ、我が家……つくふう……って、あはあっ、いつ、いひっ、いい……ものよ……ね……。」

コレード家のドアの前で、ガブリエラはフリオにしがみついて、息も絶え絶えに言った。タクシー（見知らぬ人運転）に乗ってこのマンションまで戻ってきたが、マンション入口からここまでの道程の、何と長かったことよ。

「ゴメンよ、ガブリエラ。俺が君をここまで抱えてくればよかったんだよね。」

「い、いい、のよ……フリオ、うっ！」

と、ガブリエラは腹を押さえた。

「大丈夫かい、ガブリエラ！」

「大丈夫なわけないだろ、さっさと家の中に入れておやり！」

割って入ってきたのは、マドモアゼル・アントワネット。御年八十は超えてる。それでもマドモアゼル。カーラーを巻いた頭にネットを被って、フリルが豪華についたピンク基調のネグリジエ姿。

「……ええと、マドモワゼル・アントワネットでしたっけ、二階の。何かご用で？」

ポケットを探って鍵を出そうとしつつ、フリオが尋ねる。

「用も何も、キムに緊急出動を頼まれたのよ。助産師としてね。睡眠不足はお肌の大敵だつていうのにな。」

ぶつぶつと文句を垂れながら、アントワネット嬢は鍵の開いたドアを率先して開け、二人を先導していった。

「寝室はこっちなね？」

「は、はい。」

「奥さんを早く寝かせて。」

「はいっ。」

「予備のシーツはどこ？」

「え、ええと……。」

「そ、その棚……上から三段目の一番右……。」

「予備のタオルはどこ？」

「え、ええと……。」

「旦那、もういいから、キッチンでお湯を沸かして！」

「タオルは……うっ、はあっ、バスルーム……。」

ときばきと寝室を出産仕様にしていくマドモアゼル。

一体、助産師歴何年なんだろうか？

最後に、持参してきた木製タライをでんつとベッド脇に置いて、彼女は額の汗を拭いた。

「ふう、これでよし。」

そして、フリオに名刺をピッと差し出す。

「何かあったら電話して。」

颯爽とアントワネット嬢はコレード家を後にして、自分の家に寝に帰っていった。

「……ユ、ユリア、は……？」

苦しそうなガブリエラの声で、ぽかんとしていたフリオは我に返った。

「ユリアかい？ 自分の部屋で寝てるんじゃないかな？」

「そ、それなら……いいけど……。今の騒ぎで……起き

てしまっ……たら、か、可哀相……よね……。」

フリオは、ガブリエラに「ちょっと待ってて」と身振りですすと、寝室を出て、ユリアの部屋のドアに耳を当てた。何の物音もしない。

「うん、静かに寝てみたいだよ。」

にっこりと妻に伝える。

「よかった……。」

ガブリエラも、眉間に皺を寄せつつも、安心したように微笑んだ。

しかし、その頃、ユリアは。ついでにオリバーは。

「ゴメン、ユリア。僕、もう歩けない……。」

道端でへばっていた。主にオリバーが。

そんなオリバーに何も言わず、ユリアはじつと彼の両足を見つめていた。やにわに彼女はオリバーのスニーカーを彼の足からむしり取った。

「うわっ、何？ どうしたの、ユリア？ 何する気？」

「靴、借りるわ。」

乾いた血のついた足を躊躇いもなくオリバーのスニーカーに突っ込むと、靴紐をぎゅっと引いて縛る。

「さ、オリバー。」

と、背中を向けるユリア。

「……うん……。」

ユリアの意図しているところがわかり、オリバーはその背にしがみついた。

「行くわよ。」

オリバーを背負って、ユリアはのしのと歩き出した。

その足取りの力強いこと！

「……ゴメンね、ユリア。ホントにゴメン……。」

黒髪に頬を寄せて、オリバーは呟いた。不甲斐ない自分が嫌で堪らない。

「いいのよ、オリバー。気にしないで。」

メソメソしているオリバーと、鼻息荒いユリアは、ずんずんと病院に近づいていきつつあるのであった。

狭い機内トイレの個室の中、キンケイド氏は困っていた。用は足した。あとは席に戻るだけだ。しかし、しかし。問題は二つある。一つは、どうやらこの飛行機がハイジャックされていること。そしてもう一つは（こっちの方が深刻な問題なのだが）、トイレトペーパーが切れていることだった。生憎、クリネックスの持ち合わせもない。ハンケチは持っているが、これは、妻の母が去

年の結婚記念日にくれた手刺繡のもの。尻拭き用に下ろしていいはずもない。そんなことをしたら、マリアン（妻）に、思うさま棒でぶたれるであろう。マリアンの使う「棒」は、生地伸ばし用の棒（名称は知らない）で、軽いが、本気で振ればそこそのダメージは出る。それに、そんなにいつも妻にぶたれている父親では、一人息子のオリバーに対して威厳が保てないではないか。

というわけで、尻拭く術を持たぬ砂漠のビジネスマン、ミスター・キンケイドは、便座に腰を下ろしたまま迷方に暮れているのであった。

その頃、隣の個室の中では、イワン・ストコドコイも困っていた。問題は二つある。一つは、どうやらこの飛行機がハイジャックされていること。これに対しては解決策がある。つまり、この個室を出て、ハイジャック犯をぶちのめせばいいのだ。ストコドコイ氏、百戦錬磨どころか、全戦全勝がご自慢のロシアン・マフィア（表の職業はリゾート開発会社経営）であるからして、『マザー・アースなんちゃら』とかいう、いかにも弱っちそうな集団など敵ではないはずだ。しかし、そのためには、この個室から出て行かねばならない。はい、ここで登場、問題その二。トイレットペーパーが切れているのであった。しかし、この個室は今、清掃を済ませたばかり。ということは、清掃担当のアテンダントが、ペーパーの補充を忘れたんだね。

「忘れた奴、許すまじ。」
ストコドコイ氏は広いデコに靑筋立ててそう誓うと、何か紙の代わりになるものを探し始めた。

五分後、個室内で考え得る対策の全てを検討し、また全てに失望したミスター・キンケイドは、新たな手段を外に求めることにした。トイレの向かいのアテンダント・クロークに誰かいれば、トイレットペーパーを貰えるだろうし、最悪ハイジャック犯に見つかってしまったとしても、相手も人間である以上、尻拭く紙なき心細さについての同情心くらい持ち合わせているはずである、と考えたのだ。アメリカ人らしい発想である。

というわけで、そっと個室の鍵を開け、折り畳み式の

ドアをそっと開いて顔を覗かせてみるミスター。同様に隣の個室から顔を出していたストコドコイ氏と目が合った。

「やあ、またお会いしましたね。」

いかにも奇遇だ、という表情で、ミスター・キンケイドは言った。ストコドコイ氏は、「同時に個室に入ったんだから、会って当然じゃないか。何言ってんだらうこのアメリカ人は」と思いつつ、

「ええ、またお会いしましたね。」

慇懃にそう答える。

「ロスにはお仕事で？」

「ええ。おたくは？」

「私は帰省です。」

「それは結構。ところで、その、ロールペーパーがあれば分けてくれないかな。こっこの個室、切れてるみたいでさ。」

「奇遇ですね、こちらもです。」

にこやかに会話を交わしながら、溜息をつく二人である。

「しかし客席の方が騒がしいですね。」

「ハイジャックとか言ってたよね。」

個室から首だけ伸ばしてビジネスクラスの客席を見る。カーテンの隙間から、何かのパンフレットらしきものとダイナマイトらしきものを両手に携えて怒鳴っている男が見える。

「エコノミーとファーストと機長室にも仲間がいるんじゃないですね。」

「普通に考えればそうだね。ビジネスクラスだけ乗っ取ったって、飛行機は目的地には行かないからね。」

「じゃあ、私たちは、ハイジャックに挟まれているってわけですね。」

「そういうことになるね。」

「それは大変だ。」

「そう？」

「そう、じゃないですか？普通に考えれば。」

「僕は、拭かないまま乾き始めてる尻の方が大事に感じるんだけど。」

「ああ、そうだ。忘れてうっかりズボンを上げてしまう

ところでした。」

「じゃあさ、ズボン上げちゃいなよ。」

「え？」

「でもって、僕に紙、取ってきてよ。」

「やだなあ。」

「ハイジャックは僕が何とかするからさ。」

「本当！？」

「本当、本当。」

「仕方ないなあ。」

ミスター・キンケイドは、個室に戻り、ズボンとパンツを脱いで、脱いだパンツで尻を拭き、汚れたパンツを丸めてゴミ箱に突っ込み、直にズボンを履いてベルトを締めた。

そうして何とか体裁だけは整えたミスター・キンケイド。次なる課題は紙の確保である。もちろんトイレットペーパーであることが望ましいが、およそ使用できそうなものなら何でもよしとしよう。

あまり動き回っては、ハイジャック犯に見つかってしまう恐れがある。とにかく、レストルームに一番近い客席まで行って、何でもいい、紙を分けてもらって戻ろう。多少固くたって構うものか。どうせ使うのはあのデコッパチだ。

ビジネスマンらしく、目標と計画を定めたキンケイド氏はそろりそろりと個室から抜け出した。一番近い客席に人がいるかどうかをチェックする。と、その時、ちょうどおしゃべり向きのものがキンケイド氏の視界に入った。機内食のワゴンである！これならきつと紙ナプキンを備えているに違いない。あのワゴンから、カトラリーセットを一つ取ってくるだけで問題は一気に解決するのだ。おまけに、ワゴンがハイジャック犯の視界を遮ってくれるはずだから、見つかる心配も少ない。

これぞローリスク・ハイリターン！

勇んだミスター・キンケイドはそろそろと匍匐前進でワゴンににじり寄っていった。もう少し。あとちょっとでワゴンに手が届く。緊張のあまり震える右腕をミスター・キンケイドが一杯に伸ばした時。
ガクン。

飛行機が乱気流に突入し、機体が大きく前方に傾い

た。

ゴロゴロゴロ。

スロープと化した通路を、ワゴンは独りでに進んでいく。

ガッテム！ ストッパーをかけてなかったのか、キャビン・アテンダントの馬鹿野郎。

ミスター・キンケイドが心の中で叫んだのと、その一部始終をトイレのドアの隙間から見ていたストットコードコイ氏が舌打ちしたのはほぼ同時だった。

暴走したワゴンは、通路の真ん中でダイナマイトを手にしてハイジャック犯の一人に真つ直ぐ向かっていった。

機内で緊迫した状況となっているのは置いておいて、ロサンゼルス国際空港では二人の男がガッツポーズを決めていた。なぜなら、二人が見つけていた電光掲示板に「ARRIVED」の文字が出たからだ。そして、今更のようにアナウンスが。

「アブダビ発597便、エンジントラブルのため約二時間遅れで到着いたしました。」

親分さんを持つ男、その名をスタング・スタッグスと言うことがこの数時間で判明したが、彼はその図体に似合わぬ笑顔（しかしグラサンは着用）でハンニバルの肩に手を回した。

「ここで待ってた甲斐があったぜ！」

しかし、ハンニバルは浮かない顔であった。それはなぜかと申しますと、このAチームのリーダーは、つい先ほど部下に電話をかけて、フライトに不審な点がないか調査するように言いつけたからだ。因みに、永遠を思わせるコールの後、電話に出たのはマードック。寝惚けた声ではあったが、確かに「ラジャー」と答えていた。飛ぶものについてはプロフェッショナルな彼のことだから、本格的に調査してくれることだろう（命令を覚えていれば）。だのに、その飛行機は無事に到着してしまっただ。遅れが生じた原因も、エンジントラブルだ。砂混じりの茅ヶ崎ならぬアブダビ発なら、さもありなん。恐らく、アンカレジ辺りに降りて、砂の混じった燃料を濾過しつつ燃料タンクの掃除をしていたのだろう。

命令を取り下げるか否か。それが問題だ。

到着ゲートから続々と姿を現す、疲れ切った態の乗客たちを見つめながら、ハンニバルも疲れた溜息をついた。この男と親分さんとをどこかに送り届けた後、マンションに戻って、マードックがまだ部屋にいれば、「さっきの、なし」と言えはいいか、などと考えながら。

「……変だな。」

スタング・スタッグスが顔から笑みを消して言った。既に、アブダビからやって来た数少ない乗客たちは、荷物を受け取り、空港を後にし始めている。

「どうした？」

「親分がいねえ。」

彼は、キョロキョロと辺りを見回し、もう一度言った。

「やっぱり、親分いねえよ。」

「見つけられなかった、というだけじゃないのか？」

ぶんぶん頭を横に振って否定するスタング。

「親分を見つけらんねえわきゃねえだろ。」

その時、ハンニバルは、きらびやかな（悪く言えばド派手な）服装の、アクションの大きい大男を想像した。そして恐らくは、両腕に一人ずつゴージャスな美女をホールドしているであろう。それなら、見逃すはずがない。

「おかしいなあ……。」

スタングは首を捻った。

「……本当に、この便なのか？」

「ああ、確かに昨日の朝十時頃、親分が電話で『七時台の便に乗るから、そっちに着くのは四時頃になるね』って言ってたんだ。昨日の夜七時の便に乗ったら、こっちに着くのは朝四時だろ？」

「……いや、違う。きつと、違う。」

そう、アブダビを昨日の夜七時に出たって、ロサンゼルスに朝四時には到着できっこないし、そもそもスタングの頭には時差でもんがならしい。午前か午後かものはっきりしてないし。

「インフォメーション・カウンターで聞いてみよう。」

ハンニバルの意見にスタングも同意して、二人はインフォメーション・カウンターに向かった。

黒づくめの男とバジャマ姿の白髪の男を前にして、

案内嬢は一瞬表情を固くしたが、すぐに営業スマイルを浮かべた。

「アブダビ発の便は、この後、何時に到着するのか、教えてほしい。それから、アブダビ・ロス間の所要時間と、アブダビとの時差も。」

「は、はい。」

いかにもボケ老人のようなルックスのハンニバルに、畳みかけるように的確な質問をされ、案内嬢は再び営業スマイルを曇らせた。そして、かなり真剣に答えを調べる。

「まず、フライト所要時間は約二十時間となっております。時差は、現在ですと十一時間です。アブダビ発の便は、約二時間置きに出ています。」

「ふむ、ありがとう。……スタング、さっき言った親分さんの言葉をもう一度。」

「え？ ああ、『七時台の便に乗るから、そっちに着くのは四時頃になるね』だ。」

「お姉さん、こっちの時間で昨日の朝十時頃に、アブダビにいる男から電話で今の台詞を聞いたんだが、その男の到着は何時になるかな？」

まるで算数の問題である。案内嬢はメモ用紙に計算を始めた。

（考え中。）

「わかりました！」

しばし後、晴れ晴れとした顔で彼女は挙手した。

「今日の十六時着の便で到着予定です！」

「やっぱりな。どうもありがとう。」

案内嬢に礼を告げると、ハンニバルはスタングに向かつて言った。

「ほら見る。半日間違えてたぞ。」

「マジかよ。」

カウンターにうつ伏すスタングであった。

【つづく】